

希望の種

ふくおか NPO ファイル

30

日本の伝統工芸品は、その多くが技術を受け継ぐ後継者不足に悩まされています。そんな中、いち早く人材育成に取り組んだNPO法人「博多織DC(デベロップメントカレッジ)」(正式名は博多織技能開発養成学校)の取り組みはユニークで、全国からの視察申し込みが絶えないそうです。

博多織は鎌倉時代に始まったとされ、江戸時代には福岡藩初代藩主の黒田長政によって、幕府に反物や帯が献上されるようになった伝統工芸品です。

ただ戦後は、和装から洋装への切り替えが徐々に進み、「きもの産業年鑑」(矢野経

博多織DC(デベロップメントカレッジ)

事務所=福岡市博多区▽電話番号=092(472)5102
メールアドレス=hakataori@forest.ocn.ne.jp

博多織DCでの研修



職人育て文化を守る

(学長)は、重要無形文化財は年90万円。年間の定員は8名程度と狭き門ですが、希望者は途切れることなく、この10年間で輩出した人材は約70人。うち個人事業として独立し、博多織職人としての研鑽を積みながら事業を進めている人は30人以上に上りま

「献上博多織技術保持者(人間国宝の小川規三郎氏)です。カリキュラム作りなどの準備を経て、07年には初の研修生説明会開催を行いました。高校の先生を経由してのチラシ配布や、フリーペーパー掲載などによる一般公募…。やるべきことはやったものの、本当に希望者が集まるのか、スタッフは不安が募りました」

16年には、それまでの「手に職をつける」から、「身に付けた力で自立する」へと、大幅なカリキュラムの刷新を行いました。職人を育てる技術に加え、華道、琴、能などの日本の芸術文化を学ぶ授業が多かったのですが、今年からは基礎的な技術に加え、市場調査や販売促進、デザイン、経営、海外展開などビジネスプロデュースの力を育てることに力点を置いています。

事務局長の野口敏彦さん(仮認定NPO法人アカツキ代表理事 永田賢介)

「おわり

済研究所)によると、きもの市場は1980年時点では1兆8千億円でしたが、2015年現在では約2800億円と大幅に縮小しています。それに連れて、着物を織る伝統技術の継承者が減っていきま

こうした事態を危惧した博多織工業組合と福岡県が中心になり、05年に立ち上げたのが博多織DCです。現理事長

が、当時100人を超える希望者が集まったそうです。08年にはNHK福岡放送局の依頼で、博多織DCをモチーフにした特別ドラマ「博多はたおと」が製作されました。地域の文化や産業を守り育てたいという人々の方で、活動は発展してきています。

博多織DCは、座学と実習が毎日ぎっしりと詰まった2年間のカリキュラムで、学費(70)は「これまでの10年で技

術職人を、これからの10年でクリエイター・プロデューサーを育て、この2種類のプロフェッショナルがコラボすることで、博多織という伝統工芸を再び産業として盛り上げていくことができると考えています」と語ります。

研修生の90%以上は女性で、仕事を辞めて博多織の世界に入る30~40代が最も多いそうです。幼い頃に母親などから着物を着せてもらった思い出を抱く女性たち。ひたむきに伝統工芸を学ぶ彼女たちは数十年後、博多文化の発信者である職人の中心になっていくことでしょう。

博多織DCの17年度(11期生)の入学願書提出締め切りは12月31日午後6時。試験(与えられたテーマに対する文章またはイメージ図の作成や面接など)は1月21日午後1時です。